

茂木草介

大槌家のひとびと

大徳の人の心



大槌家の人びと

昭和四十九年七月二十五日 第一刷

著者 茂木 草介

発行者 浅沼 博

印刷 三 秀 舎

製本 田 中 製 本

発行所 日本放送出版協会

郵便番号 一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

検印廃止

目次

とんぼちようちよう

五

モンペを脱いで

四

再婚ばなし

六七

セキリ天国

一三

幻のスシと天ぷら

一五

空襲・町が燃える

一六

イワシは死んだ

三四

蛇のお芝居

三九

梅雨の前ぶれ

二六

題
字

カ
バ
ー
装
幀

米
谷

誠

一

大槌家の人びと

トンボちようちよう

与一郎が後妻をもらった。

まだ病死した先妻のおいまのおもかげが与一郎の心のなかに巢食っていて「まだ後妻さんをもらうには早うます、いまでもおいまが夜なかに、わての枕許へ立つことがたびたびおますね」と、一応は気の進まぬ様子だったが、母のふさが「けど、こんどのひともおいまという名前だっせ。世間にはようある話で、後妻さんを先妻さんの名前で呼んだばかりに泣きの涙でサトへ帰ってしまう、というような心配はまずおまへんわな」

「へえー、そんなら二代目のおいまだすな」

「そうです、正直で働き者で、怠け者のあんたにはうってつけですがな」

と、すすめたのは姉のたか子で、与一郎が怠け者だという点では妹のはな枝もみつ子もたか子に同調してクスクス笑いながら、ついでのようにこの縁談に賛意を表した。

「さやか。みんなが賛成するなら、べつに、わてもトコトン反対する理由はおまへんさかい、よろしう頼みますわ」

見合いは鞆うづぼの家ですませた。なんといつても戦争中のことだから仰々しいことは一切避け

た。与一郎は国民服、二代目のおいまはモンペ姿で八畳の客間へ坐つて女中のお兼がどこかの手に入れて来た芋ヨウカンをつつましく食べて話した。

おいまは六甲山の北、三田町の山奥の生まれで春は羽束川^{はつかがも}のジャコ取り、秋は松タケ山へはいつて松タケを見つけて取るのが人一倍上手でそれが身に備わつた特技だというような話は、なんとなく先妻のおいまの性格を思い出させて与一郎の顔がほころびた。

話がまとまつて一週間後に簡素な式を挙げて、与一郎とおいまは南森町の元のうどん屋の六畳の間で、二人だけで床入りの盃を汲み交わした。

「あのな、おいまはん」

「へえ」

「あんたはたか子姉えちゃんの店で働いてたそうやが、その前はなにをしてなはつたンや」

「三田で暮らしてました」

「ひとりで？」

「へえ。十八で嫁入りした亭主が支那事変で戦死したあと、どこぞにええ嫁入り口はないかいなアと、毎日、そのことばかり考えてました」

「なんで？」

「なんでいうたかて、女はええ男はんと一緒に暮らすのがいちばんのしあわせだっさかい」

「なるほど。ほたら聞くけども、あんたの戦死しやはったご亭主とわてと、両方較べたらどっちがよろします？」

「さア、どないだつしやろな。詳しいことは暫く添うて見んことには判れしまへん」

と、おいまは正直そうな目をつぶらにして与一郎を見詰めた。

「そらそや。あんたのいう通りや。人は見掛けによらんとやうて、付き合うてみたら、案外やと思うほどにええとこや悪いとこが目について来るもンや……」

万事はいまからはじまる。与一郎はおいまの考え方が氣に入つた。そして、二人は夫婦の契りを結んだ。

与一郎は朗らかな顔つきとなり、おいまもしあわせそうな明るい顔で数日間を暮らしたが、二人の幸福がまだ一ヶ月に満たないうちに、与一郎へ国民徴用の令状が来た。昭和十八年十二月十五日のことである。

「チョウヨウレイジョウでなんだすねン」

「ひとくちに言うたら召集令状と同じや。召集令状が来たら、なにがなんでも兵隊さんになつて戦争せんならん。徴用令状が来たら、なにがなんでも産業戦士になつて、軍需工場の工員にならんならん」

「いややというてもあきまへんのンか」

「あかん」

「そんな無茶なこと……!」

「無茶もへ、つたくれもあらへん。それがいまの法律や」

「法律のことはよう知りまへんけども、あんさんに工員が出来ますのンかいな」

と言われていると与一郎に自信はなかった。生まれてこのかた、出来損いの舞台脚本を書いたり新派の俳優を勤めたり、どさ廻りの劇団を作ったり、つい最近までは大阪鉱山監督局の委嘱で慰問演芸隊を作ったりはしたが、どれもこれも言うなれば小手先の技能で、手足を存分に動かしてヒタイに汗をたらして働いた記憶は皆無である。

「けど、こうなった以上は個人の都合でとやかく言うことは出来んわな。枯木も山の賑わい、わてかて数のなかの一人や」

「そうだす」

と、鞆の家で母のふさも同意する。

「とにかく、あんたも鞆の大槌家の長男や。やれるだけやりなはれ」

「いや、やれるだけやっただけですみまへんのやで」と、妹のみつ子が口を入れた。

「徴用というのはそんな生易しいものやおまへん。これは広島県の呉の海軍工廠の話やけども、徴用工が人間ならばトンボチョウチョが鳥になる、という歌があるそうだす」

つまり、徴用工は人間扱いをされない苛酷な条件下で死ぬまで働かされる、というウワサを、みつ子が誰かから聞いて知っていたのである。

「けど、それは呉の工廠が海軍の直轄やさかいやおまへんか」と、はな枝が横から穏やかな言葉を入れた。「この町内からも徴用された人は仰山おますけど、民間の軍需工場へ配置された人は自宅から通勤も出来るし、お昼のお弁当かて一食二合のご飯が食べられるし、結構なことやと喜んだはりますうがな」

「へえー、一食に二合のご飯……」

と、舌なめずりしたのは老年のふさで、そのときの一般配給量は一人一日に二合四勺、ふさは老年の故にそれよりも少し配給量が少ない。

「おかアさん。なにを言うたはりますねン」

と、笑いだしたのはたか子である。配給量は別として、どこの家庭でも従来のお米屋さんや別のルートからの裏取引というものがあって、不足分はある程度の補いがつけられた時期である。

「けど、このあいだ、勝手口からヤミのお魚を売りに来た男がおましたやろ。キレイなハツ（マグロ）の切身やというさかい公定値段の十倍も出して買うたのに、いざお刺身にして食べたら、なんと、これがフカの身をモモ色の絵具で染めたヤツや。水臭うて生臭うて食べられへん」

「まア、ハツの話はともかくとして、与一ッちゃん、あんたの行先きはどこだすねン」

「それが、トンボチョウウチョの口だす」

「えーッ！」

今更のように、徴用の令状を与一郎の手から受け取って家族がみんな廻し読みをしてみると、与一郎の落ち着く先は呉海軍工廠、宿舎は阿賀町工員宿舎と明記してある。

「えらいことや。行先きを他に変えて貰う訳には行きまへんのンか」と、ふさが言う。

「そんな勝手なことが出来すかいな」と、たか子の顔からはもうとつくに笑いの跡が消えて

いる。

「そいで、いつ？」

「それも、その紙に書いとますやろ」

……集合日時・昭和十八年十二月二十四日二〇時（遅刻を許さず）……集合場所・大阪駅東側高架下付近。

その日。与一郎はおいまを連れて南森町の家を出て午後二時に鞆の家へ着いた。鞆では二時半から送別会が開かれた。お兼とその夫吉兵衛が中心になって台所を走りまわり、たか子はな枝みつ子が心を籠めてそれを手伝い、出来上がった赤飯にレンコダイの尻頭つきで一座は席に着いた。

「すんまへんな、わてはジーツと坐ったきりで」と、二代目のおいまが幾度もみんなに詫びる。

「かめしまへん。あんたはまだこの家の勝手が判れへんのやさかい」

と、ふさは赤飯と大根のナマスだけを別のちいさい器に盛って仏間へ立って行った。

「おいま、一緒においで」

与一郎はやさしい声でおいまを立たせて母のうしろへ従った。

しばらく見ないうちに、うす暗い家のなかで仏壇だけが明るく大きく見える。

「おとうさん」と、ふさは亡き夫の位牌に合掌してジュズをもんだ。

「与一郎がえらいことになりましたな。聞くところによりますと、徴用工というのは、カラスやスズメの仲間やのうて、トンボやチョウチョみたいな虫けらの仲間になることやそうです。

……あんさんも生きておいでときは頼りないお方でしたけど、この際、元気を出して与一郎を守ってやっとなはれ。お願い申します」

与一郎は母の肉のうすい背中を眺めているうちにふと涙を走らせた。おいまも目をうるませながら、横に坐っている与一郎の手をまさぐっている。小声で「なア、あんさん。わても一緒に呉へ行ったらいきまへんのやろか」と言う。

「あほなこと言いはんな。わては兵隊と同じやということなんべんも言うてるやろ。どこの世界に嫁さんを連れて戦争に行く兵隊があるかいな」

与一郎は、家族みんなの見送りを断って午後七時に鞆の家を出た。おいま一人だけが桜橋の交叉点まで従^{したが}いて来た。

「もうええ、帰んなはれ」

「もうちよっと……」

「もうちよっとて、もうそこに大阪駅が見えてるやないか。女連れで行ったら、わてが叱られるさかい」

おいまはコクリとうなずいて交叉点を東へ、南森町の方角へ歩き去った。

「元気に暮らしなはれや」。

振り返らずにおいまがコクリとうなずくが見える。町もおいまのうしろ姿も暗い。そのうしろ姿がちいさくなるのを待ち兼ねたように与一郎は北の方角へ大股に歩いた。肩から掛けた布製のカバンがやけに重い。寝ふとんや下着や数冊の本などはすでに数日前にチッキ便で阿賀町へ発送してあり、この鞆にはタオルと歯みがきと、汽車の中で食べる今夜の夜食とあすの朝食にあてる握り飯がはいっているだけである。握り飯はお米を一升炊いて作ったという。米が配給制度になるまで自由に売っていた汽車弁のご飯は七勺程度だったとすれば、この二食分の握り飯は汽車弁の十四倍あることになる。重いのは当り前だ。しかし、これをどのようにして食べたものか。だが大槌家全体の好意が、この十四倍の飯にこもっているのだ。

高架下の広い通りへ来て、与一郎は呆れて目を見張った。定刻にはまだ三、四十分も時間があるというのに、その付近にはもう千人に近い男が、ほとんど電灯のないくら闇の中にうごめいているのだ。それがほとんどは黄色い国民服を着ているのだが服の良し悪しはまた格別のものがあつてヨレヨレの人造絹糸製のボロに近い汚れたものもあり、なかには陸軍の将校が着るような優秀な生地を特に両肩にパットを入れて入念に仕立てさせたようないいスタイルの国民服も少数はある。それらは良家のボンボンのようなおだやかで高貴に近い顔立ちをしており、多分徴兵検査の頃は体格が悪くて丙種の認定を受け、その後も戦局の進展とは関係なく大きな家の奥でヌクヌクと暮らして来た人種であろうか。反対に、極端に悪いのはこの十二月の寒空にシャツ一枚に人絹の上衣だけというものもある。与一郎は服装も顔つきもその中間に位置する

のだろうと自分で思った。

「申告の済んでいない者はいないか！」

と、突然くら闇のなかで係官のどなる声が聞こえた。誰も答えない。申告とは各町名別の受付の机の前へ行つて令状を示して原簿にチェックをして貰うことなのだ。

「申告で、なんだすねン？」と、オズオズと小声で聞きただした四十がらみの男がいた。周囲の者はいつときクスクスと笑つたが、すぐに自前の顔つきに戻つてそれぞれの孤立と孤独を守るのに忙がしい。

「よし！ それではみんな四列縦隊に並べ。誰でもどこでもいいから四列縦隊に並べ。早くしろ！」

四列縦隊の意味が判らずにまごまごしている者が多い。与一郎は商業学校時代の軍事教練の経験からそれとなく世話を焼いていると係官が目ざとく見つけて言つた。

「おい、お前。お前を第一中隊の輸送指揮者に任ずる。しっかりやれ」

「はい。けど、どないしたらよろしよますねン？」

「大したことはない。千人をほぼ三つに分けて三中隊とする。中隊を三つに分けて三小隊に編成し、それを一小隊ずつ三つの客車に積みこんだらそれで役目は終いや」

「はい、判りました」

客車は九輛編成の特別列車だから前から三輛を使ってほぼ三百三十人を乗り込ませればよいのである。

「皆さん、早よ並んで下さい。並んだら右を向いて番号を称えて下さい」

「お前、そんなていねいな言葉使いではラチがあかんぞ。もっと命令口調でやれ」

「はい。それでは、右向け右！……番号！」

慣れないことで声がかすれる。みんながドツと笑う。

「笑うたらあかんがな」

またみんなが笑う。

「笑うな！ 静かにしろ！」

係官が与一郎に代って編成の指揮をとり、各小隊から小隊長を任命して与一郎に引き継いだ。そのあと、小声でいう。

「しっかりせなあかんで。輸送の途中で逃亡者が出たり、任地へ着いてから人員に過不足があったりしたら、みんなお前の責任やさかいな」

「へえー、そんなことになりましたのんか」

「お前、ここへ来るまでは何をしてたんや」

「いろいろだす。けど、死んだ女房がウドン屋をやってましたさかい、わてはウドン屋の亭主だすかいな」

「ウドン屋か。……まア、しっかりやってくれ」と、係官は、中隊長にウドン屋の亭主を選任したことに苦笑を洩らした。